

マロマロちゃん  
日和



mikatuki98

今日はお天気が良いので、ミコペンさんちのマロマロちゃんはバスケットに大好きなカップ巻きを詰め込むと、ミコペンさんと一緒に春の小川までやって来ました。

ところがミコペンさんは到着するや否やスケッチに夢中になり、マロマロちゃんをほったらかしにしたままチットモ遊んでくれません。マロマロちゃんはミコペンさんの周りを駄々をこねながら転がってみせましたが、全く相手にされません。退屈なあまり、マロマロちゃんはバスケットに手が出そうになります。でもカップ巻きを食べるにも、お昼時まではまだまだ時間があります。コッソリ食べてしまったらきっとりミコペンさんに大目玉です。

仕方が無いので、マロマロちゃんは何か遊べるものは無いかと、辺りをウロウロ、目玉をキョロキョロ。すると春の小川から少し離れた場所にクローバーが群生しているのを見つけました。

目を輝かせ四つ葉のクローバーを探し始めたマロマロちゃん。その間もミコペンさんはマロマロちゃんの存在を忘れてスケッチに夢中です。それでもお互い、夢中になるものが見つかったふたりの空間にはしばらくの間、平穏で幸せな静寂の時間が流れていました。そして遂に！マロマロちゃんは四つ葉のクローバーを見つけました。

四つ葉のクローバーを握りしめたマロマロちゃんが大きなお耳を揺らしながら、笑顔で駆けて来ます。四つ葉のクローバーをミコペンさんに早く見せたくて、大きなお口でハアハア息をしながら駆けて来ます。

ところがマロマロちゃんの視界に一匹の白い犬が現われました。白い犬はじっとマロマロちゃんを見ている。何故だかマロマロちゃんも白い犬から視線を逸らすことが出来ません。そして二匹はお互い徐々に距離を縮めて行くと、小川に架かった橋の上で出会いました。

すると優しいマロマロちゃんは目線が白い犬と同じ高さになるようにひざまづき、初めはミコペンさんにあげようと思っていた四つ葉のクローバーでしたが、目の前に居る白い犬にそっと差し出しました。

しかし予想外にも白い犬が言いました。

「わたしはそんなものには興味は無い！」

白い犬の言葉にキョトンとするマロマロちゃん。

「そんな少女趣味はわたしには無い！」

マロマロちゃんには白い犬の言っていることがイマイチ理解出来ません。

「それよりもわたしは腹が減っている！」

白い犬はそう言うとチラリとバスケットに目配せをしました。

「バスケットの中は何だ！？」

白い犬は偉そうな口調で続けます。それでも四つ葉のクローバーを白い犬にプレゼントしようとするマロマロちゃん。そんな二匹の気配にやっと気がついたミコペンさんが振り向いた途端、白い犬は脱兎の如く遠くへ走り去って行きました。と、その直後です。遠くから人間

の音が聞こえてきました。

「おとうさあ~~~~ん！」

「あなたあ~~~~！」

白い犬は、どうもホワイト家のおとうさんだったようです。

その日家に帰ったマロマロちゃんは、新しく覚えた言葉をずーっと反復していました。しかもミコペンさんが疲れ果てて眠りにつくまで続きました。

「おとうさあ~~~~ん！ あなたあ~~~~！ おとうさあ~~~~ん！ あなたあ~~~~！」

「うるさい・うるさい・うるさい・うるさい！」

「うるさい？ わあ~い、うるさい・うるさい。 おとうさあ~~~~ん、あなたあ~~~~！ うるさい・うるさい。 おとうさあ~~~~ん！ あなたあ~~~~！ うるさい・うるさい。 おとうさ.....」

「Z z z z z z.....」

いつもじゃれ合う程に仲の良いミコペンさんとマロマロちゃんでした。了